

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：33919

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02319

研究課題名（和文）学習の効果を高め学校生活を豊かにする新しい学校図書館をつくる実践的研究

研究課題名（英文）Practical Research to Create the New School Library that Enhances Learning and Enriches School Life

研究代表者

笠井 尚（Kasai, Hisashi）

名城大学・人間学部・教授

研究者番号：10233686

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：学校図書館の設計を通して、よりよい空間整備と運用について検討した。ユーザーである子ども、学校司書、教師などの期待や使い勝手を設計に活かすことに取り組んだ。学校図書館や公共図書館の先行事例には、ユーザーの意図や空間デザインに生じた齟齬が散見される。たとえば、学校司書や教師の視点からは図書や児童生徒の管理的側面が重視されるが、子どもたちの希望や設計の挑戦的デザインはそれらとは対立することがある。学校図書館整備の機会を利用して、職員、資料、運営を設計に関係づけて検討することで、公共図書館と学校図書館の連携を進めたり、運営の改善を図ったりする実践に取り組むことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもの読書推進は、社会的な関心も高く公共図書館での各種行事の開催などさまざまな施策が進められている。一方、学校では司書教諭・学校司書の配置が進められているが、学校図書館の質の高い整備や利用促進は、地域により差がある。子どもの読書に対する一般の教師の関心は必ずしも高くない。学校図書館を物理的な環境整備から検討・開発する本研究は、学校図書館の利用を活性化し、子どもの学習を豊かにする方策を打ち出し、多くの学校図書館で参考にできるプログラムを用意する。学校のICT環境が整えられて学校図書館の利用頻度が下がる懸念もあるなか、よりいっそう魅力的な学校図書館の環境整備が望まれる。

研究成果の概要（英文）：Through the design of the school library, improved space maintenance and operation were considered. The project involved the design of the expectations and usability of the users: children, school librarians, teachers, and others. Prior examples of school libraries and public libraries are scattered with inconsistencies that occurred in user intentions and spatial design. For example, although school librarians' and teachers' perspectives focus on the administrative aspects of books and students, children's desires and challenging designs may be in conflict with them. Opportunities for school library improvements could be used to examine staff, materials, and operations in relation to design, and to engage in practices that promoted cooperation between public and school libraries and improved operations.

研究分野：教育行政学

キーワード：学校図書館 学校施設 調べ学習 読書 読解力 学校司書

### 1. 研究開始当初の背景

本研究者が取り組んできた学校施設研究においては、ユーザーである子どもや教師、地域住民らの考え方と、設計者による新しいデザインの学校建築が、必ずしも有機的なつながりを持たずに設計や建設が進むことに問題意識をもって、その改善を検討してきた。ユーザーの意思を汲んで学校の物理的な環境整備が進められることが期待され、同時に新しい学校施設はユーザーの固定概念の枠組みに収まるものではない。新しい学校の空間整備が教育・学習活動の質を高め、子どもたちが豊かな学校生活を営むことができるようなハードとソフトの関係を構築すべく研究を進めてきた。

ユーザーの意見には、学校改築の際の新しい環境整備に向けてはネガティブな要素が示されることも少なくない。そのような状況でも、学校図書館や独立性の高い多目的スペースなどには期待が高く、前向きな意見が示されることで、設計側も応えるべき要請がいろいろと存在することがうかがえた。学校図書館の設計に注力することで、学習活動が活性化され、学校生活の質が高められる。学校建設においても重要性の高い領域ではないかと考えられた。

子どもの教育に対する書籍利用の関心が高まっているにもかかわらず、学校図書館の空間整備の研究は意外に進められていない。これを対象とする本研究を進める必然性が導かれた。

### 2. 研究の目的

司書教諭や学校司書による学校図書館改善の活動が一部で行われている。一方で、学校の設計者の一部では、新しい学校図書館のデザインが試みられている。しかし、それらは一部の取り組みに止まり、双方の活動にはとくに関係がない。学校図書館の設計にユーザーの意見が活かされたり、新しい学校図書館を活かした運営がなされたりするといったことはまだ一般には見られない。本研究は、このような学校図書館をめぐるソフトとハードを関係づけ、学校図書館に「環境整備」という視点を持ち込むことで、児童生徒の学習活動や学校生活に資するよりよい学校図書館のプランと運営を開発することを目的としている。

### 3. 研究の方法

(1) 愛知県I市では、G小学校の低学年図書館、高学年図書館の設計と建設に取り組んだ。この取り組みを進めながら、全小中学校の学校図書館のあり方を見直し、市との協働により読書支援や調べ学習といった施策を学校図書館の設計・改善に活かし、設計や建設の立場から学校図書館の充実や利用促進を提案するというやり方で、学校施設整備(ハード)と学校図書館利用教育(ソフト)を有効に結びつける実践研究に取り組んだ。さらに、次の改築対象となったM小学校の低学年図書館・高学年図書館の設計支援に取り組み、同市において継続的にこの研究に取り組んでいる。

この期間には、市立図書館における読書推進計画の策定にもかかわることができたので、市立図書館ともつながるかたちで、実践的取り組みを進めることができた。

(2) 他の自治体でも、学校建設におけるよりよい学校図書館づくりに取り組んだ。とくに小中一貫校における学校図書館をどうつくるかという課題に、複数の自治体で取り組むことができた。

(3) 先進事例調査においては、学校図書館とともに、新しい取り組みが進んでいる公共図書館の情報も積極的に収集し、新しい書籍利用の空間整備がどのように行われているのか、空間をどのように利用して書籍利用の活動が展開されているのかを探った。私設の図書館や書店などにも注目すべき空間や活動を見ることができた。

### 4. 研究成果

(1) 愛知県I市の取り組みでは、改築対象となったG小学校において低学年図書館を構想して建設した。図書館は低学年棟の中央部分に配置し、旧校舎にあった低学年図書館の機能とイメージを引き継いだ。設計には、子どもたちや学校司書などの意見を取り入れた。学校のシンボルツリーの見えるづくり、車座に集まれる設え、旧図書館の雰囲気を活かした壁画、学校司書の作業スペースの確保、高学年図書館とのつながりを意識したデザインなど、空間整備の工夫を施した。

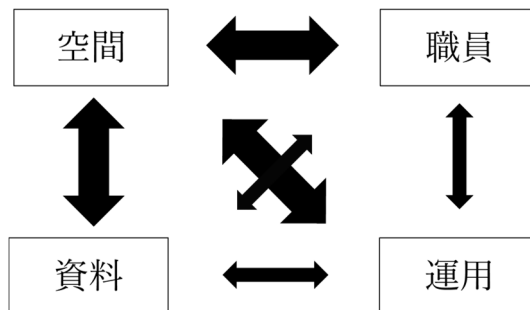
G小学校の高学年図書館は、同校敷地内に存在していた市立図書館分館と統合することにより、施設の有効利用を図るとともに、これをきっかけとした学校図書館改善へとつなげた。G小学校の高学年+開放型図書館の試みでは、市立図書館と学校図書館の連携を促す一方で、管理主体の異なる運営の同居や所有の異なる書籍の管理上の問題の克服などの課題が浮き彫りになっ

た。現在もその有効利用を模索しながら運営されている。

次期改築対象となったM小学校については、低学年の多目的スペースに同居するかたちでの設計を提案した。市としての学校図書館充実政策を引き継ぎながら、改築対象校の条件に合わせたプランを考案している。

(2) I市でこれまで取り組んできた学校改築における学校図書館づくりの文脈を整理、確認することもできた。通常の学校改築では、改善はその学校のみに限られてしまうこともありえるが、ここでの改築作業は、市全体の学校図書館改善の一環として捉えられる。

図書館に所蔵する資料の整備や利用、職員の配置や機能、学校図書館における人やモノの運用は、空間整備の視点で捉えることができる。他の3つの要素からの要請を空間的に実現することもできるし、空間的なデザインを考えることは他の3つの要素を考えることと直接つながっている。(右図)



学校図書館の整備をきっかけとして、学校司書の仕事の見直しや研修の充実、学校図書館利用教育の促進、市の重要施策として立ち上げられた読解力向上方針とのリンク、市立図書館と学校図書館の連携協力体制の構築など、教委はソフト(図書館活動)の充実施策を打ち出し、本研究からはこれを専門的にバックアップしてきた。

(3) ふたつの自治体において、小中一貫校の学校図書館づくりに取り組んだ。いずれも通常の学校図書館にくらべてかなり質の高い整備が可能となった。小中あるいは2クラス利用のエリア分け、書籍やコーナーの配置、児童生徒の希望する空間の整備、他教室との配置関係などを特徴的な課題として取り組んだ。小中一貫に固有な問題のほか、学校司書等専門職員の配置と体制、児童生徒の委員会活動との関係、中央図書館との連携、日常の学習活動における一般教員の学校図書館利用状況など、一般の学校設計・建設時に共通する課題もあり、克服すべき要素は複層的であった。

(4) 設計・建設のプロセスを通して、学校図書館をつくる際の関係者の意思の対立が明らかになった。設計者は美しいあるいは斬新なデザインを実現したいと考えているが、その工夫は利用者側の使い勝手と対立する場合がある。学校司書からすると不要なデザインの工夫のために掃除がしにくくなったり、管理には不向きな設えが建築的には魅力的と外部からは捉えられたりする。書籍の利用を促したり、限られた図書スペースを補ったりするために図書を分散させることは、書籍管理上は煩雑さを増加させる。

子どもたちは明るい図書館を期待するが、日当たりのよい図書館では本の日焼けは避けられない。子どもたちが望む「隠れて読む場所」や「ひとりになれる空間」は、司書や教師からは死角になるため支持されない。くつろぎながら読むスペースは子どもたちに人気があるが、ごろごろする姿勢を教師がよしとしないこともある。カーペット敷きは穏やかな空間を生み、吸音の点でもよさそうであるが、消しゴムのカスが落ちたり水をこぼしたりして掃除がしにくいところが問題になる。

子どもたちの読書量を増やしたいという希望は教師も持っているが、学校司書とコラボして学校図書館利用に向かう関心には差があり、必ずしも多くの教員が読書に前向きというわけでもない。学校図書館施設が充実しても、それを利用する時間が十分に確保されていなければ有効に使えない。レベルの高い学校図書館の整備が期待されるが、現実的にはなかなか合意しにくい状況が存在する。

(5) 学校図書館・地域図書館の統合事例についての情報収集では、学校と地域の同時利用には困難があることが見受けられた。小さな組織では、同時利用の可能性があるが、とくにある程度の規模以上になると、職員配置や安全管理などの点で障壁があることがわかった。資源の有効利用の点からも共同利用の期待が高まるが、実現する方法はさらに検討する必要がある。

自治体が運営する学校図書館支援センターの情報収集ができた。それらの地域では、市立図書館内に学校図書館支援の部署を置き人員を配置し、学校のニーズに対してきめ細かなサービスで対応することができていた。指定管理による民間運営の公共図書館においても学校図書館支援の資料整備が進められており、地域差があることも見受けられた。

新しい公共図書館等の多くの事例を通しては、本を読むだけではない交流の場としてのあり方や多様な図書館企画による市民の学習支援、斬新なデザインによる魅力的な空間づくり、多様なユーザーの要求に応えるための設えなど、書籍利用の学習スタイルが大きく変化しつつあることやその可能性も感じられた。多様なエリア設定や空間整備による活動変革は学校においても大いに参考になると思われた。静かな図書館を交流の場とするなど、旧来のあり方を大きく変更するような空間整備は、一部のユーザーによっては強く拒絶される様子もあり、空間整備の新しい課題も理解することができた。

(6) 実践、調査、いずれの取り組みにおいても、新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、頻繁に研究活動が阻まれた。しかし、次の課題追究に至るための素地をつくることができた。

とくに教師の学校図書館に対する期待は、必ずしも十分ではなく、教師によって関心には大きな差があった。読書や調べ学習に関するニーズや学校司書・公共図書館司書の力量や関心も、対象者によっても差があると感じられたが、学校図書館を利用する子どもの姿勢などは、かなり期待できるのではないかと思われた。また、公共図書館・学校図書館が整備している「本の推薦」冊子なども広く提供されているようであった。それらの活動や空間整備、書籍に対する期待と力量などを今後も充実させていくと共に、ハードとソフトを有効につないでいくマネジメント的要素そのものを開発することも重要ではないかと考えられるに至った。次期研究の課題とした。

#### <文献>

笠井 尚「学校の活動を豊かにする学校図書館の環境整備 : 課題解決支援型の学校図書館をどうつくるか」『日本学習社会学会年報』18巻、2022、59-62、

笠井 尚「学校と地域に資する学校図書館の施設整備 : 学習環境の設計をきっかけとした運営改善」『日本学習社会学会年報』17巻、2021、23-27

笠井 尚「学校の設計における対話の可能性」『School amenity』2020年6月号 44-48

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 笠井尚	4. 巻 18
2. 論文標題 学校の活動を豊かにする学校図書館の環境整備 : 課題解決支援型の学校図書館をどうつくるか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本学習社会学会年報	6. 最初と最後の頁 59-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笠井 尚	4. 巻 17
2. 論文標題 1. 学校と地域に資する学校図書館の施設整備	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本学習社会学会年報	6. 最初と最後の頁 23 ~ 27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32308/gakusyusyakai.17.0_23	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 笠井 尚	4. 巻 35(6)
2. 論文標題 学校の設計における対話の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 School amenity	6. 最初と最後の頁 44-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 笠井尚
2. 発表標題 学校の活動を豊かにする学校図書館の環境整備 課題解決支援型の学校図書館をどうつくるか
3. 学会等名 日本学習社会学会 第18回大会 課題研究3 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 笠井 尚
2. 発表標題 学校と地域に資する学校図書館の施設整備 学習環境の設計をきっかけとした運営改善
3. 学会等名 日本学習社会学会 第17回大会 課題研究2 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保久志・堀部篤樹・笠井尚・西本雅人
2. 発表標題 施設一体型小中一貫校設置における教育活動や校舎運用を見据えた施設整備の実践 その4 教職員ワークショップにおける意見からみた教職員の立場による見解の相違に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会大会(北陸) 学術講演会(金沢工業大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀部篤樹・久保久志・笠井尚・西本雅人
2. 発表標題 施設一体型小中一貫校設置における教育活動や校舎運用を見据えた施設整備の実践 その5 アンケート結果からみた校舎利用の実態や見解の相違に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会大会(北陸) 学術講演会(金沢工業大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笠井尚
2. 発表標題 教育学は今?(学校建築 タテヨコナメ Ver.3)
3. 学会等名 日本建築学会, 教育施設小委委員会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀部篤樹・伊藤祥希・久保久志・笠井尚・西本雅人
2. 発表標題 設置前段階における小中連携の活動へ向けた整備課題に関する研究～施設一体型小中一貫校設置における教育活動や校舎運用を見据えた施設整備の実践 その1～
3. 学会等名 日本建築学会大会（東北）学術講演会（東北大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤祥希・堀部篤樹・久保久志・笠井尚・西本雅人
2. 発表標題 小中一貫校に求められる小中連携の活動の場所選択に関する研究～施設一体型小中一貫校設置における教育活動や校舎運用を見据えた施設整備の実践 その2～
3. 学会等名 日本建築学会大会（東北）学術講演会（東北大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 久保久志・堀部篤樹・伊藤祥希・笠井尚・西本雅人
2. 発表標題 小中連携の活動の違いからみる複数のラーニングスペースの性能差に関する研究～施設一体型小中一貫校設置における教育活動や校舎運用を見据えた施設整備の実践 その3～
3. 学会等名 日本建築学会大会（東北）学術講演会（東北大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笠井尚・堀部篤樹・篠原佳則・寺西敦敏
2. 発表標題 学校と地域の教育・学習課題を踏まえた学校図書館の設計～学校図書館を核にして教育活動と生活を充実させる学校づくり その4～
3. 学会等名 日本建築学会大会（東北）学術講演会（東北大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笠井尚
2. 発表標題 学校建築と学校図書館 学校生活は楽しいですか？
3. 学会等名 愛知県立一宮興道高等学校プレカレッジ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笠井尚
2. 発表標題 学校の学習や活動を建築士が支援できる 「教育学の立場から建築士と学校の間を」
3. 学会等名 公益社団法人 愛知建築士会 「建築士の地域貢献を考える連続講座 その1」（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 笠井 尚	4. 発行年 2021年
2. 出版社 犬山市教育委員会	5. 総ページ数 12
3. 書名 犬山市の学校図書館づくり 学びの環境研究事業報告書ー（令和2年度）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	川口 洋誉  (Kawaguchi Hirotaka)  (60547983)	愛知工業大学・工学部・准教授    (33903)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件



8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------